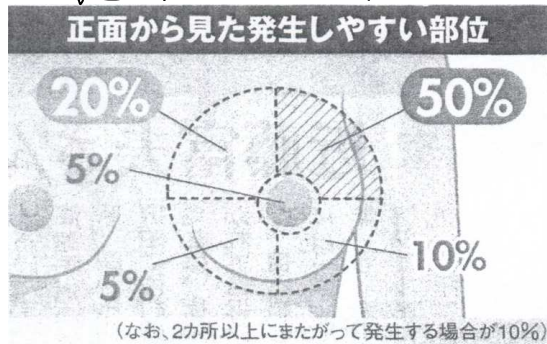


乳ガンの増加



正面から見た発生しやすい部位

当紙179号(平成23.2.21発行)で「乳ガンの自己診断」を記載しました。その時は「わが国では近年乳ガンに罹る人は年間4万人を超えました」と書きましたが、最新の統計によるとこの20年で、約2倍に増え、最近では年間5万3千人の女性が乳ガンと診断され大腸ガンと並んで女性に最も多いガンの一つに数えられるようになっていきました。しかし、最近では若い人にもみられるようになり、また、男性でも患者さん全体の0.5%~1%を占め、発症しています。

全般的な特徴

乳房は女性の第二次性徴期に胸の脂肪組織が蓄積、発達して膨らみが出てくる体の組織です。乳房の9割は脂肪で、残りの1割が乳腺です。乳ガンは乳腺組織に出来る悪性腫瘍を指します。日本人の9割は乳管で発生しています。

なぜ、急増しているのか

乳ガンの発生・増殖には女性ホルモンのエストロゲンが大きく関係しているとみられています。発症した人の約7割が乳ガン細胞にある受容体(レセプター)とエストロゲンが結合して乳ガン細胞が増殖していることが分かっています。

そこで、1)近年の女性は初潮が早く始まり、閉経年齢が遅くなったので、エストロゲンの分泌が長くなったからなのではないかと考えられます。

また、2)妊娠中は月経が止まるためエストロゲンの分泌に晒される期間が短くなるのですが、未婚や晩婚、少子化などの影響で月経が早く再開し、エストロゲンの分泌が長くなったからなのではないか、とも考えられています。

他のガンとの違い

- 1) 40歳ころから急激に増え、50歳までに罹る人が多い。
- 2) 進行が緩やかで一刻を争って治療を行わなければならないことは少ない。臓器や内臓のガンに比べて自分で注意深く触るとしこりの有無などをチェックできるため(先述した当紙

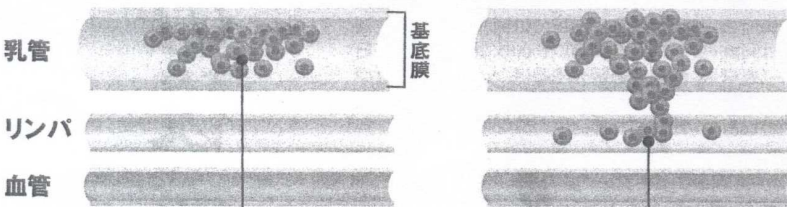
がんの進行度を示す指標

組織の内側にとどまっているか、外に出ているか

乳管で発生した場合

非浸潤がん

浸潤がん



がん細胞が乳管や小葉の壁(基底膜)の内側にただとどまっている状態をいう。生命に危険をもたらさない早期がんで、がんの切除だけでほぼ治る

がん細胞が基底膜を破って周囲の組織に広がった状態をいう。外側に出たがん細胞はリンパ節や血管に侵入して、ほかの臓器に移りやすくなる

No179号をご覧ください。) 早いうちに医療機関で見られる可能性が高い。

なお、一つの医療機関で納得できないときは別の医療機関で意見を聞く「セカンドオピニオン」という選択肢をとる制度が普及しています。また、その時間的余裕があります。(当院も患者さんが他の医療機関でも診察してもらいたいとご希望があれば、進んでセカンドオピニオンの医療機関をご紹介します。)

進化する乳ガン治療

近年、乳ガン治療は目ざましい進歩を遂げています。以前は乳房および胸の筋肉と脇の下のリンパをすべて取り去る全摘手術が主流でしたが、現在はガンのある部分のみを切除し、患部周辺へ放射線を当てることにより再発を抑えることもできるようになりました。また、ホルモン治療、抗がん剤治療、ガン発現たんぱく質の標的治療など、再発防止技術も発達しました(=乳房温存療法=第一義に乳房を温存しようとする考えが主流となりました)。さらに、乳房全摘の場合ですと、元と変わらぬ乳房再建技術も飛躍的に進歩しました。「チーム医療」として乳腺外科、外科、腫瘍内科、放射線科、病理科、形成外科、精神腫瘍科など、科の枠を超えた協働体制での治療がなされるようになり、女性が乳房を失う喪失感に充分配慮するようになりました。

(中日新聞 平成24年8月12日 サンデー版を要約)

この治療や技術が早くにあればNo179で書いた、歌人中条ふみ子女史の「乳房喪失」の中の歌

“冬の皴(しわ) 寄せある海よ今少し

生きて己の無惨(おさん)を見むか”

の歌は生まれなかったかもしれない。(文責 松井)

< あ と が き > 当院ミニギャラリー第60回は7月30日から 東護(あずまももる)さん(小浜市駅前町)の油絵です。小浜の「放生祭」の大大鼓が力作です。